

若 い ハ イ ネ

——ハイネ伝のために——

木 本 欽 吾

1.

表題としている「若いハイネ」についてまず言えば、ハインリッヒ・ハイネ (Heinrich Heine 1797—1856) がやがて詩人として活動する時期のどこに一つの区切りをつけるか、これは人それぞれによっていくらか違ってくるだろう。ここでは、ハイネが洗礼を受けてキリスト教へ改宗した1825年とする。この表題をもつもので、筆者の知っているのは、パウル・バイアーの書である。すこし古いものだが、詩制作の時期を基準としたこの書は、「若いハイネ」を「抒情間奏曲」の作詩期である1822年で区切っている。この表題の書はまだほかにもあるかもしれぬし、年代区分については、さらにこの詩人の活動期を総合して、1831年を境に二分し、「ドイツ時代のハイネ」、「パリ時代のハイネ」と多くの人に取り扱われている。筆者の選んだ区分について言えば、改宗はハイネにとってたとい形式だけのものであったにせよ、そのユダヤ教ないしはキリスト教への対決は最も新鮮で鋭く、これに「若いハイネ」の全力が傾倒されたと見えるからである。しかし反面筆者は、逆にハイネには、「若いハイネ」以外にはなかったとさえ思うことがある。これは、「晩年のハイネ」というおおまかに設けた最後の十年あまりの時期のハイネについて考えたことがあったが、その時もあった感想である。死の前の十年余の間、ほとんどあの「褥の墓」の中に寝たままのハイネは、痛みに耐えかねてモルヒネを使い、小康を得た

1) Paul Beyer, Der junge Heine, Berlin 1911.

ときは抱き運ばれて暖かい陽射しを浴びてひと時をたのしんだ。そのほかのすべての時間の寸刻をも惜しみながら、読書と詩作のためにありつたけの力を注いで、未来の世界に希望の夢を托して生涯を終ったこの人には、この名「若いハイネ」が最もふさわしいとも思われるのである。

次に、副題とした「ハイネ伝のために」についてひと言ししておく。『ハイネ伝』に属するすぐれた書は十指に近いものがある。筆者がよく手にするのは、マックス・ブロード²⁾、ルードヴィヒ・マルクーゼ³⁾のものである。前者は重く波味の強いもの、後者は軽妙な文体から、一種の爽やかさをもつ。日本でも近くは井上「ハイネ」⁴⁾を始めとして、すぐれたハイネ論とその一部にハイネ伝を添えた書が年を追ってその数を増している。舟木「ハイネ」⁵⁾のように重厚なハイネ研究書もよく知られている。ドイツでは、舟木書でも典拠の一つとされ、また、ハイネ論者としても古くから知られていた、今は亡き詩人中野重治もその名を挙げているマックス・ヴォルフ「ハイネ」⁶⁾などがあり、ハイネ死後しばらくして刊行されたアドルフ・シュトロットマン「ハイネ」⁷⁾に続いている。新しいものとしては、マンフレート・ヴィントフーフ「ハイネ」⁸⁾などその数も多い。筆者はまずは、これらの書の間どころ、つまり、大通りでなく、小さい通りをゆっくり歩き走りして行こうと思う。思いがけず大通りが筆者の前に現れ、車の洪水に押しよせられるかもしれぬ。その時の用心はしておかねばと思う。

ハイネの生れた1797年といえ、フランス革命も末期、ナポレオンがドイツも加わった反革命連合軍を制し、執政官として全権を握り、その眼を

2) Max Brod, Heinrich Heine, Berlin 1935.

3) Ludwig Marcuse, Heine—Melancholiker, Streiter in Marx, Epikureer, Rothenburg o. d. T. 1970.

4) 井上正蔵, ハイネ—愛と革命の詩人, 岩波新書 昭和27年.

5) 舟木重信, 詩人ハイネ—生活と作品, 筑摩書房 昭和40年.

6) Max Wolff, Heinrich Heine, München 1922.

7) Adolf Strodtmann, Heinrich Heines Leben u. Werke, Hamburg 1884.

8) Manfred Windfuhr, Heinrich Heine—Revolution u. Reflexion, Stuttgart 1969.

それまでの南方から北方へ、ドイツへ向けていた頃である。これに先だつ頃のドイツ国内では、最初それに好意を示した、各地方に割拠していた王侯・領主たち、高い知的水準に達しようとしていた文化人たちは、フランス国王の処刑を期に、共和国へ進撃するプロイセン・オーストリア連合軍、そしてこれを迎えるフランス革命軍、その戦乱のさ中で、フランスの自由と革命の精神を疑い失望し、これに背をむけはじめた。前者は、争いと離合集散を繰り返し、ひたすらその勢力の維持と拡大に余念がなかった。後者は、クロップシュトック、ゲーテ、シラー、これにつづくロマン主義の時代を産み出す人たちのように、あるいは民族を越えた、人類愛に基く世界的国家、芸術の美に培われた精神文化に基く道徳的国家、あるいは古代ギリシャ的共同体を祖国の未来図に描くようになった。ドイツでは、文化は政治に対して優位に立ったようにみえるが、むしろ、そこに高い理想はかかげられたけれども、その根底にはすぐれた知識人の政治を軽視することから、さらにそれへの不信と無関心が支配的で、分割されたドイツ国の行方に対する関心はほとんど示されなかった。この時代の状況を、ハイネは後にパリで書いた「ロマン派」と「ドイツ宗教・哲学史」の中で、同じような口調で、ドイツ国民の立場から伝えている—国民たちは比類のない忠誠心を王侯たちに捧げつづけた。戦争と外国の支配によって悲しい状態に落ち込んだドイツよりも、戦いに破れたみじめな王侯の姿に彼らは涙を流した。国民が重い睡魔におそわれて眠りつづけている一方で、当時の自由主義者であった学者や詩人たちがはげしく活動をしていた—。

さて余談はおいて本題へもどろう。ハイネは1797年生れである。この生年の真偽がしばらく話題にのぼったことがある。家人たちによって1798年、あるいは1799年として届けられたといわれ、またハイネ自身は懐疑主義の時代、十八世紀末に生れたといったり、さらには1800年、十九世紀の最初の年に生れたとあって、その輝かしい出生をそれとなく誇りとするように見せかけたともいわれた。今日までのところ、1798年生れが適当と推

定されている程度で、これ以上に正確を期することはむづかしい。一年、二年の誤差などはいずれにしても大したことではない。この生年の論議の中から汲みとられる一つの問題は、ハイネ出生に関連して、まだ当時のユダヤ人たちにほんとうの基本的な人権が認められていなかったという事である。そしてこれはハイネの両親、とくに父の身分に関してであった。この事は後にハネイの両親たちについて述べるときに触れることにする。ハイネ自身に生年のことをきくことができれば、今でも、私は1800年に生れた、と主張するかもしれない。というのは、まさにハイネは、十九世紀の人であったし、数多くの人たちから言われるように、二十世紀の人でもあったからである。ハイネがドイツの詩人たちの中で、幾世紀を越えて生きる力を内にたくわえている人たちに数え入れられるまでには、過去におけるこの詩人の評価の跡をふりかえてみると、長い年月がかかっている。たとえば、詩人の死後三十年を経過した頃の評価について、グスタフ・カルペレスは、その時期を三つに分けている。第一には、死ぬと同時にこの詩人はまったく忘れられてしまった。第二には、やがてはげしい攻撃の矢面に立たされた。第三には、ようやくその真価が認められるようになった。こうしたドイツにおけるハイネ受容の三つの型は、その後今日にいたるまでほぼ同じ周波で繰り返されてきたといえるし、最後の第三の時期は、ドイツ敗戦の後、詩人死後百年記念の1956年以後の状況でもある——もちろんその評価の度合いはきわめて広く、深いものになってきているが。日本におけるハイネ受容も、明治以降の先達に導かれて、今日ハイネ研究の分野にある人は数十名を数えうるだろうし、その人たちの研究成果発表の場も、たとえばすでに第三巻刊行まで漕ぎつけてきた「ハイネ研究」など注目される機関を持つにいたっている。特にこの数年間のうちにドイツ語で公刊された著書の中で、「ユダヤ教詩人ハイネ」についての、確実な資料

9) Gustav Karpeles, Heinrich Heine—Autobiographie (im Vorwort), Berlin 1888.

10) ハイネ研究図書刊行会編「ハイネ研究」, 第一巻 昭和52年, 第二巻 昭和53年, 第三巻 昭和55年, 東洋館出版。

に基く論考は、新らしい方向づけを示唆してきている。幼少年ハイネが体験しはじめ¹¹⁾るユダヤ教は、後に見るように、すでに十八世紀後半の頃までには、厳格な律法に抛りながらも変容して、新しく改革され、キリスト教、ないしはキリスト教を背景とした近代社会に同化されたといわれるものであっても、「若いハイネ」に重くのしかかって、その心を惹きつけていった。

以下に、少年ハイネを取りまくハイネ家の人たちを、まずはじめにその父母の姿を主としてハイネ自身の手になる「回想録」を通してうかがってみよう。その前に、筆者の注意しなければならぬこと¹²⁾が二、三ある。その一つは、1854年、つまり詩人の死の一、二年前に書き終えられたこの思い出の記は、残念ながら詩人の本意が十分にもられた記録とは言いがたく、したがってそれを読む側にとっても不満の残るものになってしまっていることだ。簡単に、この断篇「回想録」の運命をたどってみると、それは詩人の運命の一部の跡に似ているところがある。思い出を書きとめはじめたのは、意外に早く、1823年の頃であった。パリに移ってから、これを他の作品といっしょに公表しようと考えはじめた頃は、かなりの量の記録になっていた。それはドイツの母の手もとにあったのだが、二度の火災のために、その一部は失われるのである。とくに1842年の火災では、四冊本くらいの記録の出版をすでに計画していたのに、そのほぼ半分が灰になってしまふ。残りの二冊本くらいの記録の公刊について思いをめぐらしているうちに、この中の、詩人が物質的援助を受けつづけてきた伯父一家についての記事をめぐる干渉、紛争がはじまり、ついに和解の条件としてほとんどその半分が削除される。すでにその一部が、重ねて残りの半分が火事で失われ、またその半ばを破棄せねばならぬとあっては、その発表は断念されるよりほかにはない。1848年に詩人の手に残された「回想録」はこのよ

11) その一つは：Ludwig Rosenthal, Heinrich Heine als Jude, Frankfurt/Main 1973.

12) Memoiren 1854.

うなみじめな姿のものであったが、これだけにはとどまらなかったのである。やがてすぐに始められた回想の記録作業で生れた成果のうち、1850年にはいった頃にまたしても作者自身によってその半分は焼き棄てられた。1854年は、回想の最後のまとめに懸命の力が注がれた年でもある。だが今日遺されているものは、この最後の「回想録」そのままではない。ハイネの死後にまだ削除者の手がそれを待っていた。弟マクシミリアンである。マクシミリアンが自分で破り取るとすれば、筆者たちがぜひ読みたくおもう、ハイネ家、それに伯父一家に関する記録にちがいない。このようにして、いまわたしたちの前にあるものは、詩人がほとんど死にいたるまで綴りつづけた記録のほんの一部にすぎない。ここで原作者のためにしるしておきたいことがある。この手記の中心となっている家庭、親族者、そして宗教に関する記録を、あるときは外からの強制によって、ある時は自発的に破棄しながらも、なおも最後にそれを書き改め、再生させようと作者はつとめたのはなぜであろうか。そう問いかけるよりも、わたしたちは、この回想の記述者は、単なる私的生活・信条の記録としてではなく、ひとりの人間の告白としてこれを伝え、共鳴、あるいは反感を越えて、読者たちの賢明な判断に委ねようとした、そう考えるのが妥当であろう。この「回想録」について、それは事実そのままではなくて、幼少期への思い出を詩人の生涯の中へほどよく位置づけようとする作為が働いているところから、他の親近者たちの同種のものと共に、その信頼性はつよく疑われている。たしかにみずからも「わが人生のメルヘン」の名を与えているように、作者の主情によって濃く塗られており、その取り扱いには慎重さを要するだろう。だが、その主情の一つに、ハイネ一家が貧しいユダヤ人を祖としていることを蔭蔽して、後に社会的な地位と名声を得た人たちをその汚名から守ろうとしたとするなどの意見には組しえぬ。それはこの記録の苦しく多難な出生の跡が物語ってくれる。いわゆる「詩と真実」の混淆した記述のうちで、とくにハイネの場合そうであるが、その表層に現れた最も真実らしいもののごとくが真実そのものではなく、扮飾と捏造とから成り

たっているように見える仮構を支えるものが虚像のみではない。それに、この思い出の記は、詩人の幼少期について書きのこされた唯一のものである。回想を始めるにあたって、「不愉快な家庭の事情と宗教問題についてのつまらぬ配慮から、またもその半分ほどが破棄されてしまったこの記録には、それでも当時のすべての重要な事柄が忠実に報告されています。」という言葉に、わたしたちはむげに耳をおおうことが出来ようか。幸いに、他に自伝的要素を取り入れた多くの作品が遺されている。その成長期にしたがって、この人を知るためにそれらはよい助けとなるだろう。しかし、いま「若いハイネ」を書き出すにあたっては、この歪められ傷だらけになった「回想録」はやはりいちばん力をかしてくれる。

つぎに筆者が気をつけねばならぬ二つめのことは、上に挙げたプロートとマルクーゼの「ハイネ」について、たいへんユダヤ教の側へ傾斜しすぎているという、ヴィントフーアの注意である。たしかに、とくにプロート「ハイネ」にそれは感じられる。それにしてもこれらのハイネ論者たちが、レッシングやモーゼス・メンデルスゾーンのことを知らぬはずはない。¹³⁾ それにも拘らず、こうした非難をうけるようなハイネをあえて伝えているのはなぜであろうか。これはいずれ後に、若いハイネの成長が進むにつれて触れる時機が来るであろう。

最後にもう一つ。「回想録」の窓を通して「若いハイネ」の幼少期を見ることにしているが、このような方法でひとりの人のある時期を観察することが適当であるかどうかである。ハイネ自身が後にしばしば非難攻撃をうけ、はげしくこれに反論する場合に、たいてい心の中に堅く持っていたのは、たとえば次のような事例に含まれるものであった。悲劇集として発表された作品のうちで、詩劇「アルマンゾル」にはげしい非難を浴びせかけられたときに、これに対する憤懣を友人に宛てた書簡の中でこう訴えて

13) Moses Mendelssohn (1729—1786), 貧しいユダヤ人街出身者。十八世紀後半へかけて、ユダヤ人に、文化と政治との分野から民族的自覚をうながし、近代の社会活動参加への道を開く。

14) Almansor 1821.

いる。「…この作品には、ほんとうの批評にはそのまま従わねばならぬ多くの点がある。わたしの気づかぬことを率直に指摘されるのなら、何の苦痛もわたしは感じない。ただわたしの周辺に起った事柄から（これがどういう意味かは分てくれますね）、つまり著者の過去の出来事からその作品を解説しようとされれば、これくらい著者に深い傷をおわせるものはない。」¹⁵⁾これは一般に伝記類に限らずすべての作品を読むにあたって、最も警戒しなければならぬことだろう。これも上述の書簡に一部は述べられていることだが、筆者もそれに同意を示しながら、筆者が「若いハイネ」像を書きすすめるにあたって、次のことを言っておきたい。一つの作品は（この「回想録」をも含めて）それ自身独立したものであるし、その作者の一つの体験も、それが作者に（幼少期であっても）どんなに強い影響を与えているように思われても、それは一つの体験にすぎない。なぜなら、いうまでもなく作者はいつもその体験を越え、体験を一般化しなければならぬからである。矛盾だらけとよく言われるハイネの言説、作品もそのままの形で読む者を納得させるだろう。そのさまざまな姿を通して、読者は自由な判断をもって、その作者について一つの全体像を読者みずからのために造り上げる。ハイネという人は、こうした読者たちに最もふさわしい詩人だといってよい。

ハイネ家の人たち

ハイネの父について、「回想録」からその容姿、人柄などを知ろうとする前に、父方の祖先にもすこし触れておく。すこし、といったけれども、実際にほんのすこししかわかっていないのだ。ハイネ自身がこの思い出の記の中で、父方の祖父についてはほとんど話してはもらえなかった、と言う。ただ一度、無口な父にたずねた時に、「おまえのおじいさんはチビのユダヤ人でな、大きなヒゲをつけていたよ。」¹⁶⁾と言ったことがあるだけだ。

15) Friedrich Hirth, Briefe Nr. 53. (以下、書簡番号のみを記す。)

16) 以下の「…」で示される部は、「回想録」からの直接の引用文。

これは後に述べられる母方の祖先についてはかなり多くの事を聞かされ、自分の眼でもって家に遺された記録を読んでいることと際立った対照をなしている。これまでに明かになっているところでは、ハイネの姓を得たのは十七世紀半ばのことで、始祖はイサーク・ハイネといった。この頃はまだユダヤ人が姓を名乗れることは珍しいことであったと思われる。十五・六世紀までは、屋号を持つだけで、〇〇屋のイサークというぐあいだった。この始祖はチューリングゲンの森にはじまるヴェーザー川が低地帯へ下ってブレーメンを流れ過ぎてゆく、その川岸の小さい港町リンテルンの出身。十五世紀頃のドイツ国内のユダヤ人の分布した場所は、川ぞい、とくにライン河、またマイン川に多く見られる。海岸と川の沿岸がいつの時も大事な生活の根拠地となることは当然である。1682～1696年の間に、始祖は出身地から南方の山地へ移り、まず伯爵領の首都ビュッケブルクで、それに必要だった特別納税とひきかえに保護状をもらい居住を許されるが、このときイサークはユダヤ人教区の代表者に選ばれている。そして伯爵家へ御用商人として出入りを許されるのは、それから間もない。この時保護状の更新手続きをしているところからみると、当時この地方におけるユダヤ人の居住権は意外に長期間のものになっている。もちろんこの保護状はその土地限りのものであった。その息子シモンの代となった1734年の頃、ライネ川を遡ってハノーバーへ移り、保護状を与えられた。シモン・ハイネはここにその死まで約十年間居住している。さらにその息子ハイマン・ハイネにいたると、ハンブルクの銀行家の美しい娘を迎え入れてその家運は一時すこし上向きとなる。ハイマンは少年ハイネの祖父で、あの「大きなヒゲをつけた小さいユダヤ人」であり、銀行家の愛娘であった、美しい祖母についての回想の中に、この祖母をハノーバーへ連れていった祖父の手腕をたたえ、不幸にして六人の息子と祖母を残して早く亡くなるこの祖父を惜しむ文がある。六人の息子を出生順にみると、始祖の名をもらったイサーク（フランスへ移住、その息子はパリの有力な銀行家）、ザムゾン（ハイネの父）、ザロモン（その母の生家の系列銀行をたよってハンブル

クへ、後にそこで有数の銀行家)、マイアー (ハンブルクの東シュバーリンへ移住、資産家となる、二人の息子は医師)、ザムエル (夭折)、ヘンリー (ハンブルク株式取引所員として成功、その息子は医師)。夭逝したザムエルは別として、遠いイサーク、すこし遠いマイアーに触れられた記事はない。ハイネの弟マクシミリアンは、長男イサークたちをパリのハイネ家、二男ザムゾンたちをデュッセルドルフのハイネ家、そして三男ザロモンたちをハンブルクのハイネ家と呼んでいる。また、これら六人の息子たちのほかに二人の娘があり、そのうち末娘ズザンネの名を挙げて、その抜群の美貌のことだけを伝え、これらハイネ三家の初代の人たちは、豊かとはいえぬ父ハイマンの家を早くから捨てて、他国へ移らねばならなかったと付言している。当時のハノーバーといえ¹⁷⁾ば、ビュッケブルクと同じく寒村にも近く、ここだけで十分な生活の資を得られる町ではなかった。大勢の家族をかかえるハイマンからして、その足はハノーバーの外へしばしば踏み出されたにちがいない。六人の息子たちはつぎつぎと生れた町を去って行った。それまでの彼らの歴史が示すとおり、生れ故郷を、ユダヤ人たちは持つことが出来ない。ユダヤ人たちは、その生れた町とは何の関係ももたない。町とは、そこでキリスト教徒たちの干渉をうけずに思い思いの商売ができ、彼らの信ずる神の祭事が許される場をその時その時に提供する所にすぎない。二男ザムゾン (Samson) は、兄弟のうちで最も成功の道から遠くを歩いた。そのすぐの弟ザロモン (Salomon) はこの道をほとんど一気に走りつづけ、その目標を達成した。この二人の兄弟の間柄については、後にまた触れねばならぬ。いちばん若い叔父ヘンリー (Henry) からは、成人後ハイネは時に物質上の援助を受けたりもした。自分の死の一年前に亡くなった叔父を悼んで、その子ヘルマンに送った書簡¹⁸⁾の中で、ヘンリー叔父がやさしく、善良で礼儀正しかったこと、けっして嘘をつかず、

17) Maximilian Heine, Erinnerungen an Heinrich Heine und seine Familie, Berlin 1868.

18) Briefe, Nr. 1350.

人を傷けず、心から誠実な人だったこと、嘘偽と不正だらけのハイネ一門には類まれな人だったことを述べている。

さて上の系譜にみられるとおり、始祖、第二代は一時地方の君侯の邸に出入りして商品取引、資金用立の役をつとめた。それは日常生活の資材というよりも、むしろ戦衣や軍資金に関係するものであっただろう。戦争が終ればおはらい箱である。そして何よりも、商売によって生きるためには、より大きな町をみざさねばならぬ。父祖たちは北ドイツから川の流れを遡って中部ドイツへ流れて来た。第三代ハイマン・ハイネは、一時期はハンブルクへ足をとめたと思われ、アルトナの銀行家と縁を結び、ハイネが生涯を通じて深いかかわりをもつ叔父ザロモンの銀行家としての成功もこの血縁関係に負うところが多い。末の叔父ヘンリーもこれを助け、自分の利得にもした。医業を選ぶ縁者たちが十九世紀へかけてその数を増す。中世では、医業にたずさわったユダヤ人たちも、他の教区民といっしょに軽蔑されたままであった。急病人と告げられて訪ねた家は豚小屋であった。血を売り歩くというあらぬ噂をたてられたこともあった。その社会的地位が認められはじめるのは、とくに十八世紀にはいって、一つにはユダヤ人全体の抑圧された人権がいくぶん緩和されたこと、また一つには医学の各領域に専門化が始まり、医療方法が進んで行ったことによる。これらのユダヤ人医師といっしょに、商品仲買業、金貸業をもって宮廷付きとなったユダヤ人 (Hofjude) は、十八世紀半ば以来急速に、その職業に伴う特権によって、またたいていは兼職の教区民代表という地位によって、しだいにユダヤ人の中の上階層を形づくってくる。宮廷付きとなって金銭出納、衣食料品仲買、さらには貨幣鑄造管理、とくに軍需品調達に携るユダヤ人が頭角をあらわすようになるのは三十年戦争 (1618—48) の時代からといわれる。その軍隊は高い報酬めあてに応募した傭兵で編成されるので、戦争はいつも高いものについた。しだいに増してきた信用取引の需要に応ずることのできる者はユダヤ人で、その中でもとりわけ金融、商品売買業者が大きな富を手にした。当然この人たちには新しい特権が与えら

れ、遠くオーストリアでは貴族に列せられる者までであった。こうしたユダヤ人が、キリスト教徒たちの反感と憎悪を買っていたことは中世と同じで、いったんそのパトロン¹の王侯の死にあいなどすると、逮捕され、処刑された。十七世紀後半まで跡づけられて、始祖とされるイサーク・ハイネの知られざる父祖たちは、三十年戦争の時代をどういうふうにかいくぐってきたのだろうか。

この富裕層に属する者のユダヤ人全体に占める数はきわめて少数であった。そしてこれらのすこしばかり小金を貯えたユダヤ人層が生れるまでの、少くとも中世紀から十八世紀末までのその歴史をみても、それは商才と幸運に恵まれた生やさしい道程ではなかった。ドイツ国内の各地に散在したユダヤ人たちの大部分は、非人道的な劣悪な生活条件のもとで忍従を重ねた後に、さまざまな口実で突然に町や村から追い出され、難民となつてつぎの生きる土地を求めて移動して行った。居住移転の自由も束縛されることが多かった。ようやく求められた土地に住むためには、居住許可証、ユダヤ住民登録証を必要とし、そこに定められた厳しい規制の条令に従わねばならぬ。金貸しと古物商以外は手工業、商業に従事することも許されず、人頭税をはじめとする多くの納税義務を負わされる。その人口増加を抑えるために、結婚の組数も制限された。居住区域はたいてい町や村のはずれの小さい区画に指定され、窓のほとんどない狭苦しい住家の増築も制限され、わずかに納屋を付設できるくらいのものであった。横に広がる余地はなく、ようやく許される二階、三階建の、軒に軒を接してひしめくユダヤ人街は、いったん火事が起れば一切合財を灰にし、あげくのはてはまたも卑劣な口実のもとで、着のみ着のままその土地を追われる。それが主としてヨーロッパ、中近東地域に、海ぎわ、川ぞいに生きようとして集合離散して行った中世ユダヤ人の姿である。これらの人びとの中から、すでに富裕な、あるいは有力なユダヤ人が現れている。例えば、ライン河沿いのヴォルムス、マイン河沿いのフランクフルトに見られるように、最初はキリスト教徒といっしょに住んで、市内に教会堂をもつが、ユダヤ人

の数が増加するにつれて（その原因は早婚にあるとした）、キリスト教側の地区管理者はその代表の選出を要求し、ユダヤ住民条令を公布しはじめた。この代表者は、宗教問題は律法学者に任せ、ユダヤ人の生活全般の世話人である。キリスト教徒側代表の行政担当機関へ請願などをするが、多くは住民条例の改正、付則事項を教会堂で受けるのが主な仕事であった。教区民長としての地位にはなにがしかの特権がともなう。これとは別に、中世では度重なる迫害のためにその機会はほとんど失われがちだったが、金貸業、いわゆる高利貸の悪名で迫害の口実とされる「ユダヤ悪徳商人」がしだいに蓄積した富によって台頭してくる。キリスト教徒を召使いとする者もあり、傲慢不遜の輩として指弾された。

この状態はその後ゆっくり変動しながらも、十八世紀末（ハイネの生れる頃）までほとんど変らなかつた。変らぬどころか、十九世紀はじめには中世紀よりもさらに悪い状況にみまわれることさえあった。さきに述べたいわゆる「悪徳商人」の流れを、十八世紀後半に汲みとって、その先頭をきって行くのが、マイアー・アムシェル・ロートシルトである。フランクフルトのユダヤ人街に生れ、地金銀取引と両替商で身を立てた。1800年頃のフランクフルトのユダヤ人は三千人といわれる。そのうち富裕層はその5%にも足らなかつた。ユダヤ人家族の十分の一が、ユダヤ人全家族の財産の半分を所有していた。ドイツ国内では、ユダヤ人大衆は小都市、地方の田舎町に分布し、僅かな裕福な層が、大都市のベルリン、ハンブルク、マイン河のフランクフルトに集中していたのだ。すこし後のものだが、1816年の統計には、当時のドイツのユダヤ人口を三十万と推定するものがある。その四分の三は苦しい労働を強いられている。二十万を越える重労働従事者のうち、そのほぼ二割は雇人、でなければ乞食であった。これらの奴隷状態にちか境遇の者は、帰る故郷もなく、どこにも自由に居住することができず、働く場所も与えられなかつた。この人たちを支えるのは、ユダヤ教区民全体の負担する救済基金だけであつた。

ハイネの父ザムソンは、その父ハイマンによって遺されたいくばくかの

財を元手に、当時はまだイギリス領ともなっていたハノーバを足がかりにして、マンチェスター製綿織物を売りさばいたり、食料品仲買にも手を出していた。一つの機会がやってきたことがあった。それはフランス革命直後と思われる1790年の頃、ハノーバーの選帝侯フォン・カンブレントの王子エルンストがベルギーのフランス領内へ侵攻した時のことである。父ザムゾンは軍の兵站部付きとして後方陣地で活躍したのだ。だが、ただ兵士たちの口を満足させただけで、後には王位につくエルンストから一顧も与えられなかった。幸運は逃げて行ってしまった。おまけに、この野営時代に賭博や愛馬の道楽をおぼえてしまった。それに軍隊生活、というより閲兵行進をしたり、似合いの軍服をつけて、剣を吊り、その格好と音をたのしんで一日をはしゃぎ過すという生活をこの上なく愛するようになった。このような粹な伊達男を思い浮べさせる父の横顔を「回想記」は、「わたしの祖母の六人の子供のうちで、祖母の美しさをうけついでいるのは父と叔父ザロモンだけです。父の美しさには、やさしすぎるころがあって、ほとんど女性的といってもよかったのですが、けっして男らしさに欠けているということではありません。」と伝えるが、少年ハイネの顔にその面影はふかく宿されていた。カンブレント王子軍の加わったフランス領ベルギー遠征は、その頃も続いていた英仏間の市場争奪戦の一つであった。一方でプロセイン軍はフランス革命軍に敗れて、ライン東岸をその手に委ねるなど、1800年代はドイツ帝国崩壊前の混乱期のまっただ中にある。「回想記」で、わたしが生れたのは18世紀末、懐疑主義の時代という頃にあたる。父ザムゾンはハノーバーから商用の足をデュッセルドルフへ伸して行くうちに、町でその名も高い医家へ出入りし、時には宿を借りることもあった。ここで、後に述べる、ハイネの母となるベティー・ファン・ゲルデルンを知る。この個性豊かな母を父が迎え入れたことについて、ハイネは、祖父が美しい祖母をそうしたときにほめたたえたように、喜びの言葉を与えてもよかったのだが……。1796年頃、この町で新しい生活を始めようと決心した父ザムゾンにとって、ハノーバー時代、カンブレント公家での

御用商人、輜重兵長として活躍した思い出には忘れがたいものがあっただろう。そうしたザムゾンはまったくの無一文で、開いた毛織物商店の元手は妻からのものであった。ハイネが生れた前後の第一回のフランス軍占領期は五、六年続いているが、人口一万五千人たらずのデュツセルドルフの町には自由フランスの気配がただよいはじめていた。ここには特別な街区ゲッターはなくて、当時その数300~400といわれるユダヤ教徒は、キリスト教徒の中へはいつて生活をしていて。父ザムゾンはほどなく市の防衛団幹部に選ばれているのだが、その持前の、やさしい明るい気質は両教徒側から好感をもって受け入れられたと思われる。さきに、父は女性的だけでも、男らしさがなくはないと伝えることを述べたが、この父がふとまじめくさって息子の前に立ったことがある。それは「回想記」の中の二つの場面に示されている。ユダヤ教徒たちの代表にも選ばれていた父ザムゾンが、民生委員役として生活困窮者の世話をしているところがその一つである。救済基金の援助金をもらうために、朝早くから列を作ってハイネ家の前に集った人たちの中から、最も貧しい者は金入りの袋を二つもらうのだ。そのうちの一つは父個人のポケットから出た金一封であった。後になって父の懐具合が悪くなった時でも、気持ばかりの志を袋に入れて渡すのであった。その傍の高い椅子に坐った少年ハイネに、父ザムゾンは物の「与え方」を同時に教えているのである。お返しを期待せず、ただ「与える」だけということについて父は専門の先生であった。もう一つの場面は、カトリック系中学校に進んでいた自分の息子が、神様を信じない子だと告げ口をされて、父がいつになく顔をすこしこわばらせて語るころだ。哲学を勉強しているということだが、それは自分の好きなようにやったらよい。お父さんはあれは嫌いだ、迷信だからな。父ザムゾンは言葉をついで、神様を信じない息子がいるとなると、お父さんの商売にひびいてくる。ユダヤ教を信じる仲間はマンチェスター製品を買ってくれなくなるからな。少年ハイネがはじめて聞く父の長口説であったが、最後にこう言われた、「神様を信じないということは、大きな罪だよ！」そこには冷

たくさめた父ザムゾンの顔があった。だが一方では、おまえはおまえの好きなようにやってよい、と心の広さも示している。この人はやはりやさしい、むしろ内向的で、ゆたかな感情を胸にたくわえた人で、一度それを外から誘い出される機会がえられると、この人はとまらぬほどに走りつづける。「無限に人生を楽しむ、これが父の性格の特徴でした。楽観的、享乐的で、その御機嫌ぶりは花でいえばバラ色です。しょっちゅうお祭り気分なのです。」貧しい老女たちに取り囲まれて、寸志入りの袋を与えること、それが楽しく、それに酔っている。商買第一といって、その実はマンチェスターに目がない人だ。この商品で大儲けをしたという父の話は怪しくて、競争相手にしてやられたふしがある。いつも計算はするのだが、たくましい商魂など持ちあわせず、「その商取引は、子供の兵隊ごっこ、ままごとと同じで、一種の遊びにすぎなかったのです。」父ザムゾンには、「回想録」の中でもかなり多くの紙数が費されている。その記述方法には、弱々しい人、遊び好きの人、行動力のない楽道家というふうに、その消極的な側面の繰り返しが多い。シュトロットマンの父ザムゾン記をみても、きわめて言葉少なに触れられ、ほとんど無視されているといってよい。ヴァルフも、信ずる宗教も愛する祖国も持たぬエゴイスト、その日暮しをたのしむオブティミスト、と言うだけである。それはこの「回想録」の「父の部」が根拠とされているからであり、今日までそのまま続けられてきた。ハイネはこの記録の中で、だれに対してよりも深い愛情をもって、父を思い出している。ブロートも言っているが、父に対してのかけ橋は愛情よりほかになく、したがって感性的に父をとらえるという点では、ハイネの散文の中でもすぐれた記述となっている。その小さな例をあげてみる。「ほんとうに父という人は、無邪気な素朴さをもった大きな子供でした。その邪気のなさは、その道にかけては抜け目のない実際家の浅薄な眼では、お人好しくらいに簡単に割り切って考えられるでしょうが、ふとなにかある意味深重な発言をすることがあって、その言葉を通して絶対に聞き逃してはならぬ重要さをもつ、実地に即した観察力（直観力）がどこからか伝っ

てくることがよくありました。父はその精神的触覚で、頭のよい人たちがじっと考え込んだ末にやっと掴むことを嗅ぎつけるような人でした。頭で考えるというより、むしろ心で考え、その心ばえは、およそ想像しうるもののうちで最もやさしい、情味あふれるものだったのです。〔……〕その声にも、男らしく、よく通る声でしたが、なにか子供らしいあどけなさがありました。〔……〕父が言葉を口にしますと、いつもその声は、耳などとおっていき 必要がないかのように、もうちに胸にじんときるのです。」このような部分部分の一つにまとめてみると、多くの人たちが言うように、ここに見られるザムゾン像は、実際の父ザムゾンからはほど遠いもので、すこし美しく理想化されているだろう。しかし、この記述が高く評価されるのは、そこには、ただ単にハイネの父が見られるばかりではなくて、一人の、この時代多くの場所で見られたであろう「父」の型が、また、一人の「善良なユダヤ商人」の姿が描き出されているからである。もちろん、そのような効用を持つ反面に、それは現実の「父ザムゾン」の十分な記録とは言いがたいものがある。例えば、少年ハイネは父の商売をよく理解できたであろうか。また、無神論者とも言われる父ザムゾンに、息子への長い説諭を、神を信じないのは大きな罪だと結ばせたのは、誰であろうか。父ザムゾンは楽道家であったから、無造作に祖父ハイマンを「ヒゲのユダヤ人」と息子に告げ、その言葉を息子は学校で級友たちに、それがなにか新しいニュースでもあるかのように口づたえ、クラス全体は大騒ぎとなる。そのために少年ハイネは、先生から生れてはじめてのムチ打ちの罰をうける。ムチが背中に残した青黒いスジの痕を少年は忘れることができなかつた。そうしてこの事は父子の間の話題にもぼらなかつた。多くの欠落部をもつこの記録は、少年ハイネが成長するにつれて、他の記述ですこしづつでも埋められていくだろう。商品の売れ行きを案じて、神を信じるように説得する、商売下手の父、次の機会を得られれば、父ザムゾンの商人として、かたわらユダヤ人としての活動について述べ、多少の父としての復権を試みたい。